
妻からの手紙

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妻からの手紙

【Nコード】

N13650

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

内山公彦は結婚して二七年、仲の良い夫婦だった。

内山公彦は、今日も朝食にごはんに生卵と醤油を混ぜて食べていた。

妻が三カ月前に急死してから、家事もやったことのない彼は、ろくなものしかなかった。あとは野菜を切って、焼肉のたれで炒めたり、レトルトのカレーや冷凍食品しかなかった。

娘はいたが夫の赴任先が北海道で、東京へはなかなか戻れそうになかった。息子はまだ大学四年生で就職が決まらず、父親の食事など考える暇もなかった。

内山は結婚して二七年。五六歳だった。妻の理沙子はまだ五二歳の若さだった。定年になったら一緒に旅行に行こうとよく話していたものだ。そんな理沙子が

「父さん、頭が痛い」

そう叫んで倒れただろうに、公彦はこの日、不燃物のゴミ当番をしていた。夏の真っ盛りに妻に頼まれて代わりに出たのだった。六時半から八時まで、仕事もこの日はゆっくりいくと部下には話していた。

「内山さん、ご苦勞様。もういいですよ、お仕事もおありでしょう」
そう声を掛けてくれたのは、近所の横山さんだった。

「いや、もう少し、この新聞紙をまとめて置いておきましょう」

久しぶりのゴミ当番だから一生懸命働いた。家に帰ると、妻に誇らしげに話すつもりだった。

「おーい、理沙子、シャワーを浴びるから、タオルとパンツ！」

だが、妻は返事が無い。折角汗びっしょりで働いてきた夫に、前はテレビでも見てるのかと腹が立って茶の間に行った。ふと、理沙子の足が見えた。

倒れているのだ。

「理沙子、どうした！」

慌てて抱きかかえたが、理沙子の顔はすでに青白く息をしているようには見えなかった。救急車を呼んでくれと叫んだが、家には誰もいないのだ。息子は昨日から大阪に試験を受けに行っていた。ゴミ当番に出かけるときにポケットに入れたケータイを取り出し、「もしもし、こちら新宿区。町32の内山です。家内が倒れてます。助けてください」

あとは、どういうやり取りをしたのかも覚えていない。近所の人が集まって来たのは、小さな路地に救急車が入って来た時だった。

横山さんが

「どうしたの、内山さん」

「家内が、家内が倒れてて」

「家は私が戸締りするから、早く病院に行つてあげて」

頭を何度も下げながら公彦は救急車に乗り込んだ。理沙子は全く意識が戻らず、着いた時には『ご臨終です』の言葉を貰っただけだった。公彦がいなかった一時間半の間に、一人で死んでいったかと思うと、耐えられなくて涙が止まらず、大の男がと思ってても声を出して泣けてきた。

娘や息子も、茫然として母の死を受け止めるのは苦しいことだった。それでも、それぞれの生活に向かって子どもたちは動き出し、公彦は残された。

「理沙子、昼飯は吉野家でいつも食べてるんだ。夜は肉を買わないからな。せめて昼間はいいものを食おうと思うけど、みんな弁当を広げるんだ。理沙子の弁当が食いたいよ」

いつまでも女々しいと思うのに、遺影に向かって話すのが止まらなかった。

そんなある日、手紙が来た。差出人は理沙子だった。手が震えて唇はぶるぶる震えた。

「なぜ？」

理沙子の文字だった。うまいとは言えないが几帳面な家内の字だ。思わず、封筒に頼ずりをする。

「理沙子、くれたのかい。天国からかい？」

封を開けると、

『あなた、結婚記念日に届くように手紙を出そうという月刊誌の応募に出しています。えーと、改めて、結婚記念日二八年を迎え、思っていることを綴ります。』

私はデパートのエレベーターガールをしていたから、みんなから玉の輿に乗るよと随分言われたのよ。思い起こせばあなたがデパートにやって来て、毎日屋上まで行くものだから、何をしているかと思っていいたら、あなたは屋上のペットショップで休憩時間に子犬を見に来ていたわね。

アパート住まいで飼えないからと、毎日いろいろな子犬を眺めていたわ。その目が優しくて、私もつい一緒に休憩時間にみるようになったのよね。

もう、娘もいなくなり、弟も就職で家を出たら、あなたの好きな犬を飼いましよう。あの子たちのアレルギーの心配も、もういいでしょう。

犬を可愛がるのもいいけど、私も可愛がってね。

古女房の理沙子より』

妻の優しい気持ちが胸にこたえた。

妻の声が聞こえるようだった。

手紙を胸に抱きしめて、膝について泣いた。

「理沙子、理沙子……」

翌日、ペットショップに行った。

可愛い子犬がいっぱいだ。

どれも八万円以上する。迷ったがこれという犬は見つからなかった。

その帰り道、公園で拾って下さいという捨て犬救おうキャンペーンという催しをやっていた。

鼻が黒くて、足に足袋を穿いてるような足先が白い子犬がいた。

毛並みはこげ茶で、目が何と可愛いことか。理沙子に似ている気がした。

「これください」

初めて内山家に飼う犬が決まった。

「これはオスですか、メスですか」

「メスです」

ますます、理沙子だ。

籠に入れてもらって、家に帰る道、通りすがりの小学生が

「わあ、可愛い」

と近寄って来る。近所の横山さんが

「あら、子犬ね。可愛いわねえ。名前は？」

「りっちゃんです」

そう言つと、横山さんは目頭を熱くしながら、頷いた。沈黙の毎日が急ににぎやかになつて来る。

「理沙子のお陰だ。人が来てくれるようになったよ。もう寂しくないよ」

子犬のりっちゃんは今朝も革靴を咥えて、掘った穴に隠してる。

「お前はいたずらつ子だな。でも鼻が土で汚れてるから、すぐばれるんだよ」

抱き上げると、肩をすくめるようなしぐさをする。

「りっちゃん、明日はお前の嫌いな予防注射に行くからな」

鼻先をぺロぺロなめながら、子犬は甘えた声を出す。

あの手紙、仏壇に置いてあつたら、息子が読んで泣いたらしい。あいつの目がきらきらしたように見えるのは、目薬のせいだろうか。アレルギーだったな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1365o/>

妻からの手紙

2010年10月8日11時38分発行